Wesley Hall News

「2003年4月 幼稚園 入園式」

青山学院スクール・モットー

地 の 塩 、 世 の 光

The Salt of the Earth, The Light of the World

（新約聖書　マタイによる福音書　第5章13～16節より）

No.84

2005. 4. 1.

説教 「スクール・モットー」－モラル崩壊の時代に－ 東方　敬信 …… 2

特集 入学

●主に信頼せよ　川島　祥子 …… 4
●「5つのお約束」とともに　上戸　秀夫 …… 5
●元気に仲良く、ありがとう　山本与志春 …… 6
●道・真理・命　大村　修文 …… 7
●新入生のみなさんへ　前之園幸一郎 …… 8
●青山らしい良い人間関係を　武藤　元昭 …… 9
●**青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その11**　氣賀　健生 …… 10
●キリスト教図書紹介 **後世への最大遺物・デンマルク国の話**　有賀　実男 …… 12

●宗教センターだより …… 14

説　教

「スクール・モットー」

モラル崩壊の時代に

東方 敬信
学院宗教部長

「あなたがたこそは」

青山学院のスクール・モットーは、「地の塩、世の光」ですが、これは、「あなたがたは地の塩である」「あなたがたは世の光である」といわれた主イエスの言葉に由来しています。それは、聖書のマタイによる福音書第５章にあります。この二つの言葉は、「山上の説教」において、まことに私たちを驚かし、奮い立たせる言葉です。

最初にこの言葉を耳にした人々のことを考えてみましょう。山上の説教の最初に、「イエスはこの群衆を見て、山に登られた」（5:1）とありますが、マタイによる福音書で「群衆」といえば、飼い主のいない羊のようなものです。「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」（9:36）とあります。「弱り果て」とは、船が座礁するように動きが取れなくなることです。「打ちひしがれ」とは、敗北感に襲われていることです。つまり、動きが取れない、敗北していると思っている群衆に、全くその思いと正反対の方向から、別の角度から、私たちを驚かし、奮い立たせるような声が響いているのです。

さらに、この個所にあるのは「あなたがたこそが」という強い意志をもった招きの言葉です。主イエスは、まさにあなた方こそがと、励ましの声を響かせておられるのです。もうひとつ大切なことは、あなたがたが地の塩となれと言われてないことです。主イエスを中心にした共同体にいるなら、すでにあなたがたは地の塩である、世の光であると断言されているのです。この言葉を耳にする私たちは、自分のような者がどうして塩になれるのか、光になれるのかといぶかってしまいます。自分のような者がそんなことができるはずではないと。しかし、そうではないのです。主イエスを中心に集まっている共同体精神の中で、あなたがたはもう塩の働きをしている、光の働きをしていると言われるのです。

「天の眼差し」

塩は、幾つかの意味を象徴しており、「純潔」を表します。たしかに塩は、きよめることをあらわします。日本社会でも清めの儀式に塩をまきます。塩が清さをあらわし、腐敗を防ぐことはどこの国においても同じでありましょう。人間の生活が腐敗するのは、究極的には人の心によることは言うまでもありません。地上の生活の中で、完全な生活ができる人はいません。しかし私たちは、自分の生き方に敏感であり、また厳しく見ることもできます。それは、他人の失敗を責めることや、自分に厳しいと言うよりも、「天の眼差し」の前で悔い改めることを知っているからです。人間の世界が、何のあやまちもおかさないようになることはできないでしょう。しかしわたしたちは、罪を悔いることができ、それが赦されることを知り、他者も赦すことができるようになり、悔い改めを生活の中に確立するときに初めて、腐敗に対して正しく闘うことができるのです。

さらに塩は、味をつけます。キリスト教精神に触れる者は、不十分かもしれませんが、人を愛そうとします。どのような人も、持ち味があるはずです。それが神によって愛されていると信じるときに、その持ち味が豊かに生かされ、また生きがいになっていくのです。愛が人を生かすと言うのは、愛せられることによって、自分を知ることができ、自分なりの使命を果す力になるからです。キリスト者は、神に愛されていることを知っているので、自分に与えられた使命や役割を思い巡らすのです。そうすると、自分の持ち味で他の人や環境も支えることができるようになるのです。

さてこのように考えてきますと、私たちが地の塩であ

ると言われるのは、自分が模範にならなければならないと言うことではないことがわかってきます。そうではなくて、神の愛に生かされて、生きることなのです。私たちに何か力があるとするのなら、それは自分たちが生かされていることを感謝するためです。したがって、それぞれの人の生活に味をつけるというのは、神に愛されて、それを感謝して、持ち味を生かすからです。いまは「モラル崩壊の時代」と言われていますが、それは人間の工夫で何とかできるような、傷の浅いものではないのです。むしろ、私は生かされていると信じるところから始まる豊かな生きがいに満ちた使命を持った生活が必要なのです。

「希望の光」

「あなたがたは世の光である」と言われる主イエスは、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（ヨハネ８：12）といわれました。この言葉は、最初からこの世が暗闇であると知って語られています。どんなに人工的な明かりがわたしたちの世界を照らして、24 時間店をあけて便利な生活を提供しても、私たちの社会では、その店を襲う人が現れ、しかもそういった事件は絶えることがないのです。ということは、私たちの社会と人間性は、心に闇を抱えたままであることを示しています。しかしわたしたちは、自分たちが世の光として輝かなければならないと考える前に、主イエスが世の光であることを知る恵みを与えられています。クリスマスによく読まれるイザヤ書９章には「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」とあります。主イエスが来られたことが、希望の光なのです。むかし、高いところにある町の明かりは、夜旅をする人には道を示す灯台のようなものでした。それが丘の上にある町といわれるものでした。わたしたちは、世の光であると言われたイエス・キリストの明かりを照り返す使命を与えられています。月や星が、太陽の光を受けて照り輝くように、私たちは神の愛とキリストの平和を照り返すのです。反射させるのです。灯台守の使命は、明かりをともしている電灯の周りを囲むガラスを磨くことだと聞いたことであります。私たちが礼拝をし、キリスト教精神に触れるのは、その光源の灯火を覆い隠す煤（すす）を取り除いて、光を光のまま照りだすようにすることです。

塩よりも光の方が積極的であることは考えておいてよいでしょう。なぜなら、「山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火を升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしない」とあるからです。このことばを耳にしても、わたしたちはもうおじけることはありません。なぜなら、それは自分を輝かすことではなく、私は世の光であると言われた主イエスの光を反射させることだからです。いや、自分を輝かすことだと誇りだしたら、灯台の光源を煤で覆い隠してしまうのです。しかしこの言葉は、積極性を表しています。自分を恥としない生き方です。社会党の委員長として責任を負った河上丈太郎は、第一高等学校に入寮したときに、同室の人に自分がキリスト者であることをどう知らせたらよいかを考えて、さりげなく何もなかった机の上に聖書一冊だけぽんと置いておいたそうです。また日本で最初の女医となった荻野吟子は、カルテの隣に自分で書いた聖句のカードを置いて自分の病人のために祈っていたそうです。いずれにしても、自分を隠さないで自然体で生きることが大切でありましょう。ある人がキリスト者をみて、その人がそんなに立派な人とは思えないが、その人の持っているものは素晴らしいと思う、と言ったそうです。信仰者は、人格も品性も立派になることを願うと思いますし、またそうすべきであると思いますが、それが目標ではなく、神の恵みによって生きているということが分かってもらえる、それこそ最大の願いではないでしょうか。そうしているうちにすぐれた人物になっていくのです。

最後に、二つだけ大切なことに触れておきます。第一は、「あなたがたの立派な行い」（5:16）という立派なということばです。それは美しいとか麗しいと言う意味です。ナルドの香油を感謝一杯に主イエスに注いだ女性に対して主イエスが、よいことをしたといわれたのと同じ言葉です。感謝あふれる行為のことです。

第二に人々が「天の父をあがめるようになるため」とあります。神の愛に応答する業は、決して自分を誇るためではありません。最終目標は、神を賛美することであり、人々がすべて神を賛美して生きるようになるためであります。これは、いつも考えておかなければならないことであります。私たちは、その受けた光を反射して輝かし、ついには、すべての人が神を賛美するようになることを願うのです。マザー・テレザもそうであったように。

特集：入学

「主に信頼せよ」

川島祥子
幼稚園主事

新入園児の皆様をお迎えし、2005年度の新しい歩みをともに一歩踏み出しました。心引き締まるとともに、これからの日々が一人一人の子どもにとりかけがえのない成長のときとなるようにと期待に心弾む思いです。

三歳児の人たちが心ゆたかに養われ、青山学院の教育理念である「神と人とに仕える」人として成長していくために、大切な土台となるのは「心を尽くして主に信頼」（箴言３：５）せよ、との聖書のみことばです。

これまで家族の中で過ごしてきた三歳児の子どもたちは、幼稚園という新しい環境におかれて、自分とは異なる様々な人に出会い、友だちとして一緒にいることを喜び、互いを知っていくのでしょう。やがて仲間として互いが生かされる喜びを経験し、様々な経験を与えてくださり、ともにいて守り導いてくださった神さまへの感謝にあふれて、今度は人に「与える」人として成長されるようにと願っています。そのような成長の道筋をつけるのは、何よりも神さまへの信頼にあります。

最初は自分中心の欲求をかなえようと、いざこざが生じるでしょう。そこで保育者がかかわって、互いに思いがあることがわかり、自分の思いを相手に伝えること、相手が自分をわかってくれること、そして自分もまた相手の思いに気づき、子どもどうしのかかわりが深まってくるのです。自分も相手も大切にされていることを実感していくうちに幼稚園という場で安心して過ごし、周囲にいる人々への信頼が増していくのです。

その根本にあるのは、自分以外の絶対的に信頼できる神さまを心の根っこにおくことができるならば、どのような状況におかれても希望を見出し続けられる、生きる力を得ることができるのではないかという考えです。心の拠り所が得られて初めて、周囲と調和しながら安心して自分を発揮することができるのではないでしょうか。保育者は年少のこの時期、信頼が増すようにと心砕いて一人一人の子どもにかかわっていきます。

子どもたちの心に聖書を通して、神さまはどのような方であるのか繰り返し語ります。わたしたちとともいて力を与え励まして下さる神さまを伝えます。旧約聖書のストーリーや新約聖書からは主にイエス様のお話を中心にしながら、生活の場面にふれたお話をも含ませて、礼拝の中で語ります。

子どもたちは心のうちから「今日はお山をつくりました」と神さまに自然に語り、感謝の祈りをささげたりするのです。聞く保育者もともに、今日も守られありがとうございますと感謝します。

私たちは幼稚園の生活が子どもたちにとり神さまの存在を感じさせるようなものとなりますようにとただ祈るものです。

万事を益に変えてくださる神さまの恵みのもと、葛藤さえも人とともに生きる喜びへと変えられ、一日一日が意味あるものとなるように、保護者の皆様とともに子どもたちの日々を大切にしていきたいと思います。

特集：入学

「5つのお約束」とともに

上戸秀夫
初等部部長

新入生の皆さま、ご入学おめでとうございます。皆さんのご入学を、在校生は心からお待ちしていました。輝いたまなざし、喜びに満ち、少し誇らしそうな笑顔が目に浮かびます。みんなで楽しく学校生活を送りましょう。

初等部の学校生活は、礼拝で１日が始まり、お祈りで１日の学校生活が終わります。また、ことあるたびに、聖書のみ言葉に耳を傾け、讃美の歌を歌います。それは、初等部教育の目指すところが、聖書をひもとき、み言葉に耳を傾け、讃美をする生活を通して、神と人を愛することのできる心を持つ、豊かな人格の基をつくることを目指しているからです。

この「神と人を愛することのできる」心を育てるために、初等部には「５つのお約束」があります。この約束は、初等部の児童がなってほしい、身につけてほしいと願う生活態度を表していると思います。

「親切にします」　「正直にします」
「礼儀正しくします」「よく考えてします」
「自分のことは自分でします」

今、この「5つのお約束」の前に、「キリストにあって」「キリストにありて」という言葉が省略されていると考えてみましょう。

キリストにあって「親切にします」
キリストにあって「正直にします」
キリストにあって「礼儀正しくします」
キリストにあって「よく考えてします」
キリストにあって「自分のことは自分でします」

この「キリストにあって」という言葉がつくことによって、単に、身につけてほしい生活態度から、もう一歩奥の深い意味合いを持つ「５つのお約束」になるように思われます。それは、自分のことで満足するのではなく、常に他者との関わりの中で、他者と共に、豊かに生きていくことの必要性と大切さを指し示しているように思われます。

聖書には、「隣人を自分のように愛しなさい」（ローマの信徒への手紙13章９節）と、人を愛することの大切さが語られています。また、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい」（マタイによる福音書７章12節）と、人を愛することの具体的な行いを指し示し、それ以上に強く、「敵を愛し、あなた方を憎む者に親切にしなさい」（ルカによる福音書６章27節）とまで激しく、隣り人への愛のあり方が語られています。

初等部では、学校生活を通して「隣人を自分のように愛する」ことができる児童を育てたいと願っています。この愛するという心の働きや行動は、誰かから言われ教えられて生じるものではありません。自分の心の中に、自ずから湧き上がってくるものです。このような、自ら心の中に湧き上がってくる思い・感情は、この「５つのお約束」を日々の生活の中で具体的に守ることによって、磨かれ育まれていくのではないでしょうか。

自分の弱さを熟知し、自分の弱い人間性をありのままに受け止め、その自分を正しく成長させることに、日々心を砕いて生活する人が、真に自分を愛することができ、「自分のように隣人を愛する」ことのできる人だと思います。そして、そのような自分を育てる第一歩は、この「５つのお約束」を素直に受け入れ、守り、実行することから始まると思います。

優しい言葉で語られている「５つのお約束」。考えれば、非常に深い意味と示唆を与えてくれています。また、他者と共に生きる社会生活の第一歩を踏み出す小学校生活のはじめに、この「５つのお約束」が目標にあることは、大変恵まれたことと感じます。この約束を常に心にとどめ、多くの友達と交わり、「自分のように隣人を愛する」ことのできる子どもとなれるよう、日々神さまの愛に守られつつ、新しい歩みを今日からいっしょに始めましょう。

特集：入学

「元気に仲良く、ありがとう」

山本与志春
高中部副部長

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。

皆さんは、中等部に入学するにあたって多くの方からおめでとうというお祝いの言葉を頂いたことでしょう。そして、共に喜んで頂いたことや、お世話になったことに対して、「ありがとうございます」と、感謝の気持ちを表したと思います。この「ありがとう」と感謝する気持ちを大切にして頂きたい。これが第一にお話したいことです。

中等部に無事入学できた。これは、自分一人だけの力でできたわけではなく、たくさんの人の助けがあってできたことであると、中学生の皆さんは十分理解されていることと思います。まずこのことに感謝しましょう。

中には、今の状況が不満だ、と言われる方もあるかもしれませんが、もう一度考えてみて下さい。私たちは、多くのものを持っています。もしかしたら、多くのものを持ちすぎているのかもしれません。そのために十分持っていることが当たり前になっていて、人より少しでも欠けることがあると、足りないことばかりが目について、これでは何もできない、こんなことではダメだと、不平不満ばかりが口をついて出てしまうのではないでしょうか。

穏やかな春の日に、今元気に、中等部生として入学の時を迎えられる、この幸せを感謝してほしいと思います。

聖書には、「どんなことにも感謝しなさい」（テサロニケ一５：18）との言葉があります。私たちは世界中の多くの人たちに助けられて生きているのです。今与えられている一つ一つの事に「ありがとう」と感謝しましょう。

第二に、お話したいのは平和ということです。中等部の今年度の年間聖句は「平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか」（ローマ14：19）です。また、「平和を実現する人々は、幸いである」（マタイ５：９）が、今年から始まる３年生の沖縄旅行の主題聖句です。どちらも平和を求めようという言葉です。

世界の平和を願うことはもちろんですが、私たちが生活している身の回りの平和とは、やさしく言えばお互いが仲良くするということではないでしょうか。中等部生は、十人十色、それぞれ個性の違う人が集まっています。ぶつかり、傷つけあうこともあるでしょう。そんな時、お互いの違いを認め合い尊重すること、互いの過ちを許し合い信頼すること、それが、平和を実現すること、仲良くすることです。まず、家族やクラス、自分の周りから平和な世界を実現していって下さい。

三番目は、元気に生き生きと中等部生活を過ごして欲しいということです。

皆さんにとってこの３年間は、新たな出会いと、変化に満ちた３年間です。生涯の友となる新しい友達との出会い、クラブ活動を通しての上級生との出会い、教科ごとに違う先生との出会い。それらの出会いから、多くの影響を受け、今の自分が変えられていきます。英語をはじめ新たな知識によって、目の前に広がる世界も姿を変えていくことでしょう。自分の体や心も大きく成長します。この変化に満ちた大切な３年間、どんなことにも積極的に取り組んで、多くのことを吸収し、学んでいって下さい。それが、「互いの向上に役立つことを追い求め」る姿であり、元気に生き生きと生きることなのです。

今日から始まる中等部生活が、「元気に仲良く、ありがとう」の３年間であるようにと祈ります。

特集：入学

「道・真理・命」

大村修文
高中部部長

ご入学おめでとうございます。

皆さんは、青山学院幼稚園、初等部、中等部そして高等部からと様々な門を通って、青山学院高等部に入って来られました。あなたが選んだこの学校で、友人との交わりを通して互いのよさを知り、楽しく充実した高校生活を過ごしてほしいと思います。

同じ学校生活を過ごしても、育った環境や一人ひとりの個性が大きく作用して、誰も同じ道を歩むことはできません。高校時代は、将来の自分の進む道を決める分岐点に立たされる時でもあります。将来の道を選ぶ可能性をたくさん持つために、高校で様々な教科をしっかり学び、自分には何が向いているのか、何をしたいのかを考えながら過ごしてください。高等部では、皆さんがどのような道にも進むことができるようにと配慮したカリキュラムを用意しています。

高校時代に模索する道とは、大学や職業選択だけではありません。何を見つめ、何を目指して生きるのか、いかに生きるのかという、生き方としての道を学ぶことが大切です。青山学院では、それを学ぶことを最も重要視しています。剣道や柔道などスポーツにも「道」という字が使われますが、それは単に力やテクニックだけでなく、礼儀作法から始まって姿勢に至るまでを究めてこそ、剣道、柔道となるのでしょう。

私たちは、高速道路をスピードを出して走る時もあれば、小径を静かにゆっくり歩く時もあります。平らでなだらかな道もあれば、険しい山道もあります。美しい花の咲く道もあれば、いばらに覆われた道もあります。そして、しばしば、道に迷うこともあります。地図をよく確かめず、勝手に道を行こうとしたことが原因です。人生もまた同じです。青山学院では人生の道を導く地図が聖書であると考えています。

高等部北校舎の中央階段に《CHRIST、WAY、TRUTH、LIFE》という文字が掲げられています。これは「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネによる福音書14章6節）というイエス・キリストの言葉からとったものです。

青山学院教育方針には「真理を謙虚に追求し」とあります。どの教科を学ぶときにも、真理の追求という姿勢なしに、ただ単に成績を上げるためだけの勉強では、真の学びとは言えません。しかしイエスが語る「わたしは真理である」という言葉には、学問的真理とは異なる意味があります。ここでの真理は科学的な事実のことではありません。イエス・キリストご自身が「真理」そのものであり、それは、全能の神がイエス・キリストにおいてご自身の本質である愛を人間に示された、という真理なのです。そして、イエスに従って生きることは、真理の道を歩むことであり、そのことが私たちを真に生かす命につながるのです。

さらにここで言う「命」とは、単に生物学的な生命のことだけに留まりません。もちろんその生命も非常に大切ですが、ここでの命は、生物学的な生命を越えたもの、つまり、人を人として生かし、真の意味で生かされていると感じる「命」のことです。

新入生の皆さんが、この聖書の言葉を心に留めつつ、「命の源」である神と出会うことができますように、高等部での学びを充実したものにしていただきたいと祈っています。

特集：入学

「新入生のみなさんへ」

前之園幸一郎
女子短期大学学長

ご入学おめでとうございます。みなさんは、これから始まる本学での学園生活について大きな期待を胸に、楽しい計画を思い描いておられることでしょう。新学期がスタートするこの時期に、ぜひみなさん全員に今一度自覚していただきたいことがあります。それは、本学の教育の基本がキリスト教信仰にもとづいているということです。本学院の教育方針についてあらかじめ理解しておくことは、みなさんのこれからの学生生活をより一層豊かで実りあるものとするにちがいありません。

青山学院教育方針の中に「神の前に真実に生き　真理を謙虚に追求し　愛と奉仕の精神をもって　すべての人と社会とに対する責任を　進んで果たす人間の形成」という格調の高い言葉が述べられています。「神の前に真実に生きる」とは絶対者であり万物の創造主である神を敬い畏れるという意味です。聖書の「主を畏れることは知恵（サピエンツァ）の初めなり」（initium sapientiae, timor Domini, 箴言１：７）の言葉にある通りです。そして、本学院の教育においては、神への畏敬の念を基本にしながら「真理を謙虚に追求する」ことがもっとも大切なこととされています。それでは、ここで言われる真理とはいかなるものなのでしょうか。そもそも出来合いの真理などというものがあり得るのでしょうか。「謙虚に追求される」真理とは、みなさん各自が素直に自分の頭と心と手とを通じて自分自身で獲得するものだと考えられます。それ以外に真理を得る方法はありません。プラトンがそう言ったから真理である、というわけではありません。教科書的な既製の知識を暗記することと真理を追求することとは根本的に異なるものなのです。

青山学院の歴史は、130年前の1874年（明治7年）にメソジスト監督教会の女性宣教師ミス・ドーラ・スクーンメーカーによって創設された「女子小学校」に始まります。スクーンメーカー女史は、女性が社会的に大きな差別を受けていた明治の初期に女子に対する人間教育の必要を痛感し、そのような女子教育の理想の実現のために第一歩を踏み出したのでした。青山学院女子短期大学は、スクーンメーカー女史によって始められたこの女子教育の歴史と伝統を受け継ぎ女子のための高等教育機関として1950年に開設され、本年の秋には創立55周年を迎えます。本短期大学の教育理念は、学生の皆さんを社会のあらゆる面において積極的に貢献することのできる覚醒した女性として育成することをねらいとしています。この理念の実現のためには教養教育が基礎となります。教養教育は、全人的で世界的な視野に立つ人間の形成を可能にすると考えられているからです。

ところで、教養教育は知識の量を競い合うことを意味しません。教養には物事の本質をとらえる鋭敏な能力、自分を超えたものを敬い受け入れる謙虚な英知（サピエンツァ）、円満な人間的品性や節度が含まれていると思われます。人格形成のための共同体であるこの大学において、皆さんが主体的に学び課外活動にも積極的に参加しながら、教養を目標に自己形成に努められることをお祈りいたします。本学のキリスト教的環境の中でゆっくり魂の深呼吸を体験されることを願っております。

特集：入学

「青山らしい良い人間関係を」

武藤元昭
大学学長

新入生の皆様、御入学おめでとうございます。優秀な学生諸君をお迎えすることが出来たことを嬉しく思います。

これからの青山での4年間の生活に、今は色々な夢を描いていらっしゃることでしょう。多くの方々にとって、この4年間は長い学校生活の締め括りです。満足の行くものとして下さい。青山はその助けをします。

さて、皆様は入学式を礼拝形式で挙げられました。戸惑いを感じた向きもおありだったと思いますが、これが青山らしい第一歩なのです。いずれ、4年後には学位授与式（卒業式）を迎えられますが、これも同様に礼拝形式で行います。今までは、漠然と青山学院大学像というものを想像してこられたと思いますが、入学式で少しは青山の実像が見えてきたのではないでしょうか。これからの相模原や渋谷での生活を通して、じっくりと青山を味わって下さい。卒業される頃には、すっかり青山らしさに馴染み、立派な青山学院大学生が出来上がっていることでしょう。

漠然とした青山像と記しましたが、皆様が青山を目指された理由の一つには、この青山が持つ雰囲気というものがあったのではないかと思います。例えば、キャンパスのたたずまいから感じられる和やかさとか落着き。原宿や青山通りに見られる華やかさ。あるいは、キリスト教信仰を土台とした西洋風の垢抜けした感じ。確かにこれらは青山のある一面を表していると思います。また、「英語の青山」といったことばから得られる国際性の豊かさ。これもまた間違いではないと思います。しかし、私が最も強く感じるのは、青山学院に暮らす人々の秀れた人間性だと思います。この青山で半年過ごされれば、皆様も多分納得されるのではないかと思います。言うまでもなく、それこそが青山学院の建学の精神が醸成してきたものなのです。

建学の精神というと、雲を掴むように思われるかも知れませんが、学生手帳に記されている「青山学院教育方針」に盛込まれていますので、是非読んでみて下さい。

中等部、高等部の6年間を青山学院で過ごした私は、在学中から良い友人に恵まれたことに感謝しています。また、大学に専任として勤めて35年になりますが、ゼミ生、顧問や部長を努めた部の部員といった人達と、非常に良い関係を築くことが出来ました。今でもお付合いが続いています。これは、私にとって大きな財産です。青山にいたからこそ得られたものだと思っています。キリスト者として、神の恵みに深く感謝しています。

こういう風に、青山には本当に気持の良い学生諸君が多いのですが、これはやはり長い歴史と伝統の中で育まれた賜だと思います。もちろん、その底に流れるのはキリスト教信仰です。

皆様の中には、あるいは青山に来たことを不本意に思っている向きもいらっしゃるかも知れません。しかし、少しでもここで暮らせば、この青山が如何に居心地の良い大学であるかわかると思います。青山に来て良かったと思われると思います。良い人間関係を求めて青山に来られた方は、十分満足されると思います。ただ、相手に対して自分も良い友人であるためには、「教育方針」にあるように「謙虚に」「愛と奉仕の精神をもって」接する必要があります。

良い友人と良い教師に恵まれた4年間でありますよう、心から祈ります。

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料

その11　―　日本メソジスト教会年会記録その他　―

氣賀 健生
大学名誉教授

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料紹介第11回は、日本におけるメソジスト教会にかかわる公的記録・史料およびそれらに関連する幾つかの史料をとりあげます。

青山学院が米国メソジスト監督教会宣教局派遣の宣教師達によってその基礎を据えられ、彼らによって初期の経営・教育が行われたといういきさつから、日本のメソジスト関係史料の多くが本学院資料センターに収められているのは、当然のことと言えば当然でしょう。その中から、まず「日本メソヂスト教会總会および年会記録」をとり上げましょう。

日本メソジスト教会の歴史は1873年（明治6）に遡ります。アメリカ・メソジスト監督教会及びカナダ・メソジスト教会の宣教師が初来日したこの年は、キリシタン禁制の高札が撤去された年であり、この宣教開始は「絶妙のタイミング」と言われました。アメリカ・メソジスト監督教会（美以教会＝メソジスト・エピスコパルの頭文字）は、横浜、東京、函館、長崎に宣教拠点を設け、カナダ・メソジスト教会は東京から静岡、山梨、北陸方面を中心として伝道戦線を展開しました。ややおくれて南メソジスト監督教会が1886年から神戸を拠点として関西から中国、四国地方に伝道しました。これらメソジスト三派が1907年（明治40）に合同して日本メソジスト教会となり、初代監督に本多庸一が就任したのです。

日本メソジスト教会の教会制度は、ほぼアメリカの監督教会の制度を踏襲したものでした。即ち4年に1度の總会、年1回の年会（東部・西部）がひらかれ、年会に於て監督が牧師の任地を指定します。下部組織として部会（連回区）があり、それぞれ部長が任命されます。これは今日の日本キリスト教団の「教区」にほぼ当るとみてよいでしょう。実際に各個教会を運営した機能は「四季会」（年4回）とよばれ、牧師、伝道師、教会役員を以て構成され、各教会はそれぞれ教会会議をもち、教勢、会計その他の審議に当りました。また監督はくまなく全国を巡回し「監督」しました。このように、教会政治において、信仰指導、信条等において、他教派と較べて著しい組織的特徴をもっていたと言えましょう。時代に従って幾らかの変化があったとしても基本的にはこの制度・態勢が日本メソジスト教会を運営していたとみてよいでしょう。

この日本メソジスト教会史研究に於て最も重要な第一史料が「日本メソヂスト教会總会及び年会記録」です。これは1907年（明治40）のメソジスト三派合同以降、1941年（昭和16）日本キリスト教団への統合に至る全時代のものが当資料センターに揃っています。「總会議事録」（4年に1回）は第1回（明治41年）から最後の第9回（昭和14年）までの全議事録、「年会記録」は東部、西部年会記録がそれぞれ第1回～第24回（明治41年～昭和6年）、昭和7年の第25回からメソジスト教会としては最後の第33回（昭和15年）までは「東部西部年会」として一本にまとまったものの全記録があります。

日本メソジスト教会史研究にとって次に重要な史料としては、メソジスト教会の機関誌である週刊『護教』（のち『教界時報』）が当センターにほぼ完全に揃っています。（この詳細については本シリーズ第6回『ウエスレー・ホール・ニュース』79号・2004年3月参照。）

さて1941年（昭和16）に日本キリスト教団が成立し、メソジスト教会はその「第二部」に編入されました。教団成立以降の年会記録は当資料室にはありませんが、「日本基督教団第二部第1回中部地方区年会議事録」（昭和17年）が1冊だけ保管されています。

なお日本メソジスト教会とは別に美普（メソジスト・プロテスタント）教会が1880年（明治13）から日本伝道を開始し、1941年（昭和16）の日本キリスト教団成立と共にこれに編入されましたが、当資料室には次の記録が残っています。

日本美普教会第26～28回年会記録
（大正6～8年）

日本美普教会第45～49回年会記録
（昭和11～15年）

美普教会の歴史については、本学名誉教授ジャン・クランメル氏のすぐれた研究（英文）が、当資料センターに現存しています。

さて、1907年の三派合同以前のメソジスト各派それぞれの年会記録は、各派の日本伝道初期の公的記録として非常に貴重な史料ですが、当資料センターには次のものがあります。

まず日本美以教会年会記録。これは北米メソジスト・エピスコパル教会の日本年会の記録です。第1回が1884年（明治17）8月28日～9月3日、築地明石町十一番会堂で行なわれ、1907年（明治40）の三派合同の前年の第24回までが揃っています（第5、6、19回欠）。また「和文・英文日本美以教会中央議会第一回記録」東京九段美以会堂・1904年（明治37）3月、という文書が一回分だけあります。

次にカナダ・メソジスト教会日本年会の「日本メソジスト教会年会記録」が、第9回（1897年、麻布教会）から三派合同直前の第19回（1907年）まで揃っています（11、13、17回欠）。カナダ・メソジスト教会は三派合同以前に「日本メソジスト教会」と名乗っていましたから、合同後の「日本メソジスト教会」と紛らわしいので注意を要します。また、「英文カナダ・メソジスト教会日本年会記録」が1889（第1回）～1899、1901～1906（1904欠）と揃っていますので、和文の年会記録を補う援けとなるでしょう。

「南美以教会（南日本メソジスト・エピスコパル教会）日本年会記録」は次のものがあります（なお、この記録については関西学院大学資料室に完全揃いがあります）。

「英文美以教会南日本年会記録」

1899～1907、1937～38

日本におけるメソジスト教会初期の女性を対象にした伝道は主として婦人ミッション　Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Churchによって担われていました。その英文の記録「婦人美以教会年会記録」が当資料センターに残されています。1886～1930年にわたる全史料です。

以上がメソジスト教会にかかわる公的資料ですが、これらに準じたものとして、アメリカのメソジスト宣教局発行の宣教関係の年誌 *Year Book* が大量に保管されています。そのひとつがAnnual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Churchで、1861～1929年にわたる全時代のものがあります。（1862、1875、1877、1890、1895～97、1909、1911、1921、1923欠）。そして1874～1923の日本関係記事のみを筆者がDrew大学にあるメソジスト史料館で収集したものが別冊としてあります。また婦人ミッションの機関誌ともいうべき *Heathen Woman's Friend* が1879年～1901年、欠号を除いて11冊、そしてこれも筆者が収集した日本関係記事が1874～1913年にわたって2冊にまとめられています。なおこの機関誌は1896年から *Woman's Missionary Friend*と名称が変わっています。これらの機関誌は、宣教師達の活動、苦労話、宣教現地の事情（日本の明治、大正時代の今となっては貴重な見聞録も数多く見られます）等が写真と共に活写されていて、大変貴重な史料と思われます。

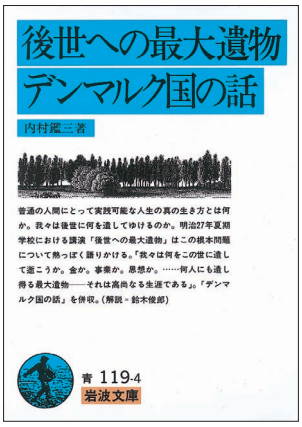
当資料センターには「サンフランシスコ福音会沿革史料」、初期の部1881～1883、2期の部1886～1891、3期の部1892～1897、という大変貴重な史料があります。これは明治期の半ばごろカリフォルニアに移住した日本人によるメソジスト系の信仰活動のグループの記録です。明治中期（明治14～30年）ごろアメリカにわたった人々の考え方、感じ方を理解するのに恰好の史料でしょう。美山貫一、鵜飼猛など初期の銀座教会の牧師の名もみられ、銀座教会がこの福音会と強い糸で結ばれていたことがわかります。銀座教会といえば、本学名誉教授ジャン・クランメル氏のGinza and the Methodist Episcopal Church in Tokyo,1873－1907の稿本が当資料センターに保管されています。

シリーズ・キリスト教図書紹介

『後世への最大遺物・デンマルク国の話』

内村鑑三　著（岩波文庫）

有賀 実男
中等部教諭



内村の膨大な著作の中で、最も有名で最も読まれ、影響を与えているのがこの『後世への最大遺物』でしょう。111年前の1894年（明治27年）7月、箱根におけるキリスト教徒第6回夏期学校での講演を記録したものです。もうすでにこの欄で扱われたかもしれませんが、私もこの優れた書をここに紹介いたそうと思います。

「この生涯はわれわれが未来に往く階段である。ちょうど大学校にはいる前の予備校である。もしわれわれの生涯がわずかこの五十年で消えてしまうものならば実につまらぬものである。……

しかしながら私にここに一つの希望がある。この世の中をずっと通り過ぎて安らかに天国へ往き、私の予備学校を卒業して天国なる大学校にはいってしまったならば、それでたくさんかと己の心に問うてみると、そのとき私の心に清い欲が一つ起こってくる。……私は死んでからただ天国に往くばかりでなく、私はここに一つの何かを遺して往きたい。それで何も必ずしも後世の人が私を褒めたってくれいというのではない。私の名誉を遺したいというのではない，ただ私がどれほどこの地球を愛し、どれだけこの世界を愛し、どれだけ私の同胞を思ったかという記念物をこの世に置いて往きたいのである、すなわち英語でいうMementoを残したいのである」という熱い思いから、いくつかのものを提案します。それら一つ一つの尊さを豊富な例でもって示しますが、誰もが遺せるものではないし、また場合によっては害となるものもあるので最大遺物とはいえないと言い、最後にこれこそ最大遺物というものを内村はもってきます。それは誰にでも遺すことができ、益のみあって害のないものとして示しています。私はあえてここにそれは何かかは記しませんが、意外性があるようで無く、言われてみれば誰もが感心・納得するものでしょう。それは人生の目的でもあり、生きる意義でもあります。

併収されている「デンマルク国の話――信仰と樹木とをもって国を救いし話」は敗戦によって国土を奪われ、残った荒漠の地を信仰と植林によって沃地に変えたデンマークのダルガス親子の壮大な物語です。80年前、内村は「国を興さんと欲せば樹をうえよ、植林これ建国である」と言ったと解説にあります。今こそ世界は戦いをやめて樹を植えるときではないでしょうか。

実はこの本をはじめて知ったのは高校の授業でした。校長で内村の弟子であった鈴木弼美先生は、これをテキストとして私たちに「おもしろいだろ」などと言いながら、ていねいに教えてくれました。

私がはじめて卒業生を送り出した年、当時中等部で教えておられていた故・牧野和雄先生が卒業生の一人一人に贈ったのも、この本でした。

この機にぜひこの名著中の名著である本書を手にとって読まれたらいかがでしょうか。

宗教センターだより

幼稚園より

園庭には桜やチューリップの花が満開に咲き揃い、暖かな春となりました。幼稚園の新しい仲間となったかわいい年少組、初めて自分たちよりも小さい存在を迎えることとなった年中組、いよいよ一番大きいお兄さんお姉さんとなった年長組。それぞれが大きくなった喜びとともに、新年度の歩みがスタートします。

○始業礼拝　４月７日
進級した年長・年中組の子どもたち、保護者の方々と一緒にまもります。
○入園式　４月12日
小さな40人の新入園児を迎え、全園児と新入園児保護者が一緒に礼拝をまもります。礼拝の中で、新入園児一人ひとりの名前が呼ばれます。
○イースター礼拝　４月15日
イエス様の復活をお祝いする礼拝の後、卵探しをします。
○春の遠足　４月26日
年長・年中組はお弁当をもって園外に出掛け、年少組はいつもよりも広々とした幼稚園で過ごします。
○母の日礼拝　５月９日
大好きなお母さんと一緒に、お母さんを下さった神様に感謝の礼拝を捧げます。
○ファミリーデー　６月11日
家族の方と一緒にたくさん力を使って、１日を過ごします。
○終業礼拝　７月14日
４月から神様に守られ、導かれて過ごせたことに感謝し、１学期が終了します。

（幼稚園教諭　久　洋子）

初等部より

新しい１年生120名を迎え、新しい気持ちで１学期が始まりました。この１年も、神様の導きと守りの家に過ごすことができればと思います。今年度は、初等部の新校舎建築が始まる年でもあります。様々な変化の中で、守るべきものを大切にして歩みたいものです。

新１年生保護者キリスト教教育オリエンテーション
４月７日（木）～11日（月）の朝、初等部の中心であるキリスト教教育の概要と、ご家庭で大切にすることなどについてオリエンテーションを行います。

イースター礼拝
４月12日（火）
イエス・キリストの復活を覚えて、日本庭園の前で野外礼拝を守ります。礼拝後、全校児童で、イースターエッグをいただきます。

お母さんへの感謝の集い
５月６日（金）
母の日を覚えて、神さまの恵みとしてお母さんが与えられていることを覚えて、礼拝を守ります。

（宗教主任　小澤淳一）

中等部より

春の教職員修養会
４月８日（金）新一年生を迎えた入学式の午後、教職員一同、新たな気持ちになって、修養会をします。今回の講師は、カトリックのイエズス会大司教、ヨゼフ・ピタウ先生です。
ピタウ先生はお若い時、鎌倉の栄光学園で教鞭を執られ、その後上智大学学長、ローマのヴァチカンの教育省などを歴任されました。
このたび、大船の教会に戻られましたので、「キリスト教教育」についてお話を伺い、心豊かな教師になれるよう、修養します。

イースター礼拝
今年のイースターは３月27日ですが、中等部では、４月22日（金）にイースター特別礼拝をいたします。説教は４月に着任された、新しい宗教主任の西田恵一郎先生です。保護者の皆さまも参加できますので、週日ですが、多数ご出席下さい。

母の日・家族への感謝の日礼拝
日本で最初の母の日礼拝を守り、それを広めた

のは青山学院です。

中等部では、そのことを覚え、毎年５月の第二日曜前後に礼拝をしています。今年は、５月９日（月）にいたします。礼拝でのお話は、前幼稚園主事、現在キリスト教保育連盟理事長の長山篤子先生です。幼稚園から育った中等部生はよく覚えていらっしゃることでしょう。

保護者の皆様をいつもお招きしております。是非お越し下さい。

（前・宗教主任　石丸泰樹）

高等部より

入学式、始業式

高等部は４月７日（木）に入学式を行い、新入生を迎えます。

８日（金）に新入生オエリエンテーション、11日（月）全学始業式、またオリエンテーションが行われます。12日（火）は全学年英語テスト、生徒会による新入生歓迎会が行われ、13日（水）から授業が開始されます。

イースター礼拝

今年のイースターは３月27日の日曜日です。高等部では少し遅れて、４月12日（火）にキリストの復活を祝って特別礼拝を行います。講師は榎本譲先生（筑波バプテスト教会牧師）です。

保護者聖書の会

今年度も保護者の方々のために聖書の会を毎月一度持ちます。聖書に初めて触れる人たちの会ですので保護者であれば誰でも参加できます。具体的な日時は「高等部便り」でお知らせします。青山学院の教育方針の基本にある聖書を学び、心の糧としていただきたいと思います。

（前・宗教主任　坂上三男）

女子短大より

キリスト教同盟校推薦入学生歓迎会

４月４日　月曜日　14:00～
女子短期大学礼拝堂

始業礼拝

４月５日　火曜日　10:00～
青山学院講堂

宗教活動委員会　春の研修・親睦会

４月23日　土曜日　10:00～16:00
女子短期大学校舎

宗教講演

５月25日　水曜日　12:30～13:25
女子短期大学礼拝堂

前期チャペルコンサート

５月26日　木曜日　12:30～13:25
女子短期大学礼拝堂

サマー・キャンプ・イン軽井沢

７月26日　火曜日～28日　木曜日
女子短期大学中軽井沢寮

（宗教活動委員　湯本久美子）

大学より

2005年度前期の宗教行事

次のとおり行われます。

○キリスト教推薦入学者オリエンテーション
　４月４日（月）　ガウチャー記念礼拝堂他
○キリスト教概論オリエンテーション
　４月５日（火）～４月７日（木）
　　ウェスレー・チャペル
○新入生歓迎礼拝
　・相模原　４月11日（月）
　・第二部　４月12日（火）

大学宗教主任研究叢書『キリスト教と文化　紀要（20）』

毎年３月に発行されるもので、記事は次のとおりです。

大島　力　「詩編における霊性――人間学的考察――」
東方敬信　「使徒パウロの経済倫理」
大庭昭博　「『社会倫理』再論（３）所有と存在」
伊藤　悟　「Godly Play、その有効性と課題
　　――とくに日本的文脈において――」
深町正信　「メソジストの信仰に生きる
　　――ジョン・ウェスレーの信仰思想(20)――」
鈴木有郷　「大統領選挙に向けてキリスト教の
　　信仰はどのような貢献ができるか」

宗　教　セ　ン　タ　ー　だ　よ　り

2005年度大学宗教委員

（文学部）大森秀子、河本洋子、那須輝彦、
Wayne E. Pounds、Joseph V. Dias
（経済学部）小張敬之、黒沼健、芹田敏夫
（法学部）Paul Mennim、臺豊
（経営学部）森川信男、Charles M. Browne、
Brian R. Duff
（国際政治経済学部）木村光彦、茂牧人、渡邊千秋
（理工学部）矢部義之、James W. Pagel、
Martin J. Duerst、David W. Reedy
（国際マネジメント研究科）井田昌之
（法務研究科）Karl-F. Lenz
（会計プロフェッション研究科）多賀谷充

宗教センター・グループ活動について

両キャンパスで開かれている自由参加型の研究会として、宗教主任が担当する「青山学院大学聖書研究会」のほか、宗教・思想・文学・社会・自然科学・福祉・音楽など大学にふさわしいテーマをキリスト教信仰とのかかわりにおいて勉強する「フォーカス・グループ」（キリスト者教員担当）があります。詳しくは『キリスト教活動のしおり』および『kairos』をご覧ください。

（宗教センター　田中健夫）

本部より

教職員新学年度礼拝

次のとおり行われます。

日　時：4月8日（金）16時30分
場　所：ガウチャー記念礼拝堂
説　教：塩谷　直也氏
日本キリスト教団梅ヶ丘教会牧師
大学非常勤講師

教職員・学生のための＜祈りの集い＞

原則として毎月第一金曜日、青山キャンパス間島記念館3階集会室2において、17:10よりおこなわれています。

短い時間ですが、聖書を学び、讃美し、共に祈り心を合わせたいと思います。どうぞお誘い合わせのうえ、ご出席ください。

（宗教センター　田中　健夫）

『ウェスレー・ホール・ニュース』解題

東門の左側にある「ウェスレー・ホール」と冠されている建物は、1968年の創立記念日に献堂式が行われ、大木金次郎院長が式辞の中で「幼稚園から大学までの学院全体の宗教活動の一大連合体としてのウェスレー・ホールの重要性」を力説なさった由緒ある建物です。このウェスレー・ホールは青山学院の総合的宗教センターとして重要な役割を担ってきましたが、事情があって「宗教センター」は1993年に間島記念館に移転しました。

『ウェスレー・ホール・ニュース』は青山学院のキリスト教教育活動のための広報誌ですが、宗教センターがウェスレー・ホールを離れた後も、新たなる宗教センターとしての「ウェスレー・ホール」が与えられることを願って、このタイトルを使い続けています。

（大学名誉教授　浅田寛厚）

No.83号　お詫びと訂正
・表紙　写真説明文
2003年3月 → 2002年3月
関係の皆様に深くお詫び申しあげます。

編集後記

2005年度最初のウェスレー・ホール・ニュースです。この春、新しく青山学院に入られたみなさん、本当におめでとうございます。青山学院は今から131年前に建てられたキリスト教主義の学校です。そしてこの冊子は、みなさんに少しでもキリスト教の精神に根ざす学院の教育に触れてもらおうと願い、つくられたものです。この号は特に、新しく青山学院に入られた方々のために、各部の責任者の方々にメッセージを寄せていただきました。

これからの皆さんの青山学院での生活がすばらしいものになるよう祈っています。

（上野）

Wesley Hall News 第84号

発行　青山学院宗教センター　宗教部長　東方敬信
東京都渋谷区渋谷4−4−25
TEL.03-3409-6537（ダイヤルイン）
URL.http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html
E-mail.agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集　ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷　万 全 社